

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：鈴木 武生

鈴木武生氏の課程博士学位請求論文 **A Cross-linguistic Exploration into the Semantics of English, Japanese and Mandarin Resultatives** (英語、日本語および中国語における結果構文の意味構造に関する言語横断的研究) の審査結果について報告する。

本論文は、英語の結果二次述語を伴う構文、日本語の複合動詞、中国語の結果動補構造を、統語的・語彙的という文法レベルの違いを超える意味的共通性からそれぞれを結果構文相当と見なし、それぞれの構文が持つ特徴や制約についてデータに基づいて分析し、比較考察を行ったものである。英語のデータソースとしては **British National Corpus** を用い、中国語データについては、老舎をはじめとする北方出身の現代小説家の作品から約 10 万字のコーパスを作成した上で、その中から『漢語動詞-結果補語搭配辞典』に収録されている動補構造を選別して対象データとしている。日本語については主に『大辞林』に収録されている複合動詞が用いられた。

本論文は 5 章からなり、巻末に分析に用いられたデータを整理して載せた **appendix** (210 ページ) が付せられている。第 1 章では使役や結果構文全般に関わる先行研究が概観され、本論文の目的とその意義について述べられている。第 2 章から第 4 章は、英語、日本語、中国語の結果構文の分析にそれぞれ 1 章が当てられているが、それぞれの章において適宜他の章でのほかの言語の結果構文との比較考察も行われている。

第 2 章は英語の形容詞句や前置詞 **into** からなる前置詞句を補語とする結果構文を取り上げている。従来形容詞補語の結果構文については、動詞の表す事象の持続可能性・瞬時性と形容詞が表す状態の段階性・非段階性とが相関することが言われていたが、データから抽出した動詞・形容詞ペアと程度表現との共起関係を詳しく調べ、実際にはかなりそうした相関から外れる事例があることを明らかにした。また、**into** を補語とする結果構文には形容詞句を補語とする結果構文とは異なって無生物を主語とする比喩的・非物理的使役変化を表す事例がかなりあること、またそうした場合には結果の終点が不明瞭な段階的なものと解釈されるものになる傾向があることも明らかにし、動詞が表す使役事象における行為者の有生性、使役行為において行使される物理的力の強度、結果発生の瞬時性という 3 つからなる使役行為の使役性の高さと、結果述語が表す結果状態の明瞭な終点の有無という 2 つの特徴が英語の結果構文を特徴付ける上で重要な役割を果たしていることを論じている。

第3章では、統語的複合動詞に比べると不透明で予測不可能な面の多い、日本語の語彙的複合動詞を取り上げている。V1とV2の関係に基づいてそれらを14種類に分ける分類を提案した上で、そのそれぞれが表す原因事象と結果事象の使役性の高低や時間関係のあり方に着目して英語の結果構文などとも比較を行いながら詳細な記述的分析を行い、agentive>causative>unaccusativeという階層においてV1より高いV2は許されないという傾向性が明瞭に見て取れることをデータに基づいて具体的に論証している。

第4章では、中国語の結果構文が英語や日本語の対応する場合とはかなり異なっていて、結果述語がかなり自由に目的語志向的にも主語志向的にもなり、単なる状況や場所が使役主になることも珍しくないことをデータに基づいて論じ、中国語の結果構文が使役主から被使役者への力の行使という因果連鎖を前提とするものではなく、因果関係を読み込めるような事象間の時間的前後関係があればかなりの程度に許容されること、またそれが許容される程度に方言差があることなどを論じている。

第5章では、第4章までの考察をまとめた上で、結果構文を構成している要素の性質が決定的に重要な役割を果たしてはいても、個々の要素が許容する幅のうちのどの部分が選ばれるかは合成相手の性質や全体としての整合性によるものであり、また言語ごとの違いにも影響されるものであることを述べて論文のまとめとしている。

審査会では、論述の仕方にやや明確さに欠ける点のある箇所がいくつかあることや、日本語の複合動詞について、提示された分析では必ずしもその扱いははっきりしない例外的な事例が存在することが指摘された。また、中国語の方言による違いを指摘しつつもその理由の説明には十分踏み込めていないこと、また、統語レベルの英語・語彙レベルの日本語・その中間的な中国語という、それぞれの結果構文の形態上の緊密さの違いが類像的にそれぞれの機能にどのように反映しているのかについての考察が今後の課題として残されていることなどが指摘された。しかしながら、データに基づいて現象の複雑さを明らかにしつつ、その中に抽出すべき有意義な傾向性を見だし、三つの言語の比較考察を意欲的に行っている点は高く評価できるものであり、博士号を授与するに十分な水準に達しているという点で審査員の評価は一致した。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。